

コラム

ち さ 萵苣からレタスへ

—在米日系人が果たした役割—

須田 満

1 長い歴史をもつ萵苣とレタス

レタスの原産地は、地中海沿岸から中近東といわれている。エジプト遠征時の食卓でペルシャ王・カンビュセス二世は、離散状態にある王家の比喩として「シャキシャキとした葉を掻いたレタスと葉の付いたレタスとでは、どちらが綺麗に見える？」と妃に質問されたという。これは、ヘロドトス『歴史』に記された紀元前525年の一節である。

遅くとも8世紀初頭に、この種のレタスは中国経由で日本に伝来したといわれ、『倭名類聚抄』(931～938)には「苣」[白苣]として登場する。この和名は「知散」、漢語では「萵苣」と書くと記されている。伸びた茎についた葉を下から掻いて食べるレタスは、その時に苦味のある白い汁が出ることから「乳草」と呼ばれたが、後にチサまたは訛ってチシャとなった。

この野菜は、日本最古の農書『農業全書』(1697)には「苗を食し、いつもやはらかにして腹中をなめらかにし、色々料理に用ゆる物」とある。今日でも、萵苣は茎をアスパラガスのように湯搔いたり、葉を膾としたりして食べるが、和食の素材としての使用頻度は低くなった。しかし江戸時代では、これは俳諧や水墨画の素材になるほど広く栽培され、食されていたらしい。『角川俳句大歳時記 春』によれば「苣」や「萵苣」は春の季語とされ、野々口立圃『はなび草』(1636)では2月、斎藤徳元『俳諧初学抄』(1641)では3月、山奴『田毎の日』(1799)では1月、油屋与兵衛『俳諧通俗志』(1717)では初春、仲春と晩春を兼ねる三春の季語として

いる。

京都の青物問屋に生まれた伊藤 若^{じゃくちゆう} 冲 (1716~1800) の晩年の作とされる「果蔬滷菜図」(制作年不明)には、中央に釈迦に見立てた二股大根を配した「青物尽くし」に萵苣が描かれている。伊藤信博によれば、この掛け軸に描かれた88種類の野菜や果物は、当時の日本で広く普及しており、野菜の生産量では大根、蕪、里芋、茄子や瓜と同様、萵苣が上位を占めていたという。また平賀源内(1728~1780)が開催した「薬品会」と称する博物展覧会の出品目録『物類品鑑』(1763)には「萵苣」の項目がある。「変種葉細長花又多シ花ハ深碧色ニシテ単弁菊花ノゴトシ朝二開テタニシボム和名ヲランダチサ又キクチサ紅毛語アンテイヒト云」という解説が記されている。この時代にオランダ経由で萵苣に似たエンダイブが紹介されていたが、生食野菜としてとして普及することはなかった。

2 明治期以降の萵苣

明治期以降、多くの外来野菜が入ってきた。『舶来穀菜要覧』(1885)では、アメリカやフランスから輸入されたレタス種子について、イラストに英・仏・独語を添えて「萵苣」、「たちゞしや」、「ちりめんごしや」、「のどしや」の4種が紹介されている。「萵苣」を「重葉球状をなし甘藍に似たる者をぼたんごしや又たまごしやと云ふ」として、14品種のレタスが説明されている。

食生活へ「甘藍」^{キャベツ}が定着した理由について、清水克志は明治期以降に軍隊や学校給食などでキャベツが利用され、それが都市住民の食習慣に定着したことを指摘している。さらに清水は、長距離輸送の可能なキャベツは、収穫期の異なる複数の生産地域から都市へ周年的に供給されるようになったことや、野菜類が欠乏する冬季において貯蔵可能である点をあげている。常温輸送の可能なキャベツに比べレタスは、長距離輸送には冷蔵が必要であるため、高度成長期時代まで普及が遅れたと考えられる。

萵苣の現代語とも言える英語の“lettuce”が「レタス」と表記されるようになったのは、明治末期から昭和初期にかけてである。『家庭応用洋食五百種』(1907)には「レチス」^{かんかさんじん}、坎坷山人は高級食料品店・明治屋の雑誌『嗜好』(1918)に「レツチス」と表記し、秋山徳蔵『仏蘭西料理全書』(1923)ではフランス語の“laitue”を「レイチユ」とした。そして、初めて「レタス」と表記されたのは篠原徳之助・金森越『西洋蔬菜の作り方・調理法』(1933)においてである。

3 カリフォルニア州に集中していくアメリカのレタス生産

D. ジェイセラーと W. ホーワースによれば、1909年のカリフォルニア州におけるレタス耕作面積は595 エーカーで、全米の11%にすぎなかった。しかし、1919年に6,100 エーカーになった耕作面積は1920年代に飛躍的に伸び、1930年には112,000 エーカーに達し、全米の50%強を占めるようになった。この拡大は、「ニューヨーク・レタス」に代表されるクリस्प・ヘッド（結球）型が冷蔵貨車を使用して長時間輸送が可能になったことによる。袋入りのレタスと砕いた氷を交互に木箱に詰めて出荷したため、この種のもは「アイスバーグ・レタス」とも呼ばれるようになった。

カリフォルニア州のレタス全耕作面積について郡別占有率をみると、1920年は春から秋にかけて生産されるロサンゼルス郡は57%、冬季に砂漠で生産されるインペリアル郡は43%であった。しかし、急速な都市化の影響を受けたロサンゼルス郡の占有率は、1930年には1%を割った。インペリアル郡は主要生産地であり続けたが、1923年の55%をピークに1930年には33%まで低下した。それに対して1920年代に飛躍的な発展を遂げたのは、サリーナスを中心とするモントレイ郡で、1930年には占有率は33%に達した。ここには甜菜糖輸送用の鉄道があり、果実輸送用の冷蔵貨車も利用できた。そこで沿線にレタス用のパッキング・ハウスが建設され、需要の急増するアメリカ東部市場へ容易にレタスが出荷されたのである。

4 在米日系人とレタス

『日米』や『新世界』といった日本語新聞には、カリフォルニア州を中心に発展していくレタス生産と、日本人移民との関係が記録されている。1909年の『新世界』には、東京帝国大学農科大学実科を卒業し、1902年にカリフォルニア大学で酪農学を学んだ池田貫道かんだう（1875～没年不詳）が、「加州菜園業者年中行事」を掲載した。そこではキャベツ、ニンジンやタマネギなどと一緒にレタスの栽培法が紹介されている。翌年、池田は恩師であるエドワード・J・ウィックソン（1848～1923）の『蔬菜栽培篇』を、アメリカでの最初の日系書店であるサンフランシスコの青木大成堂から翻訳出版した。

1912年7月『新世界』が特集した「農業百人物」の野菜部門で、レタス種苗

業者である山中丈吉と耕作者の小畑寅一が紹介された。またインペリアル郡に移住した西本菊太郎と吉村亀吉らは、1914年に同郡で初めてレタス栽培を開始した。1937年には年間200万ドルの事業に成長した功績で、同郡が彼らを表彰したと『日米』は報じている。1916年には、『新世界』の相場面に定期的にレタス価格情報が掲載され始めた。その一方で、貨車の遅れによる日系農家の被害が報じられ、日系農家とレタスとの関わりが徐々に高まっていた。

1919年2月の『日米』は、インペリアル郡産レタスが東部市場で高値取引されていることや、サンタクルーズ郡ワトソンビルでのレタス耕作面積の拡大を報じる。1922年4月の同紙は、「レタス成金続々」と題して、同年1月の寒波で南カリフォルニア産の葉もの野菜類がほぼ全滅したなかで、凍害に強いレタスを栽培した日系農家が一儲けしたと記している。ところが同年12月の同紙は、一変して「レタスは出荷過剰で市価下落」と報じる。

1922年6月の『新世界』には、「ホリスター在住田島隆之氏事業家として名声高きは既に定評あるが偶々其ウエヤハウスを覗きしに広大なる場内余す所なきレタスのパッキング最中日白人就働者中白人女性其七部を占む実に盛なるもの哉」と記事が記されている。農園経営をしていた田島隆之(1890-1933)は、1913年のカリフォルニア州外国人土地法の施行以降、ホリスターとサリーナスでレタスのパッキング・ハウス事業を展開して、1927年にはホリスターに事業を集約した(写真)。東部市場へのレタス出荷量は年間500貨車を超えて、売上高は35万ドルに達したという。



写真1 ホリスターにおける田島パッキング・ハウスの様子

[出典]『在米広島県人史』(1929)口絵

しかし、1933年9月17日の『日米』は、1931年に事業で失敗した田島はナパに住んでいたが、「事業運用資金調達の為一昨日サリーナスに赴き知己を訪問運動中であつたが話が旨く行かないのを悲観し毒薬を仰いで自殺を遂げた」と報じている。大恐慌期でもあるが、この自死は天候要因などで価格変動の激しい市場商品が生んだ悲劇である。上坂冬子は、田島の娘であるユキコ・ルシール・デービスが語ったこととして、ジェームズ・ディーン主演の映画『エデンの東』(1955)の主人公であるキャル・トラスクの父アダムモデルとなったのは、レタスの冷蔵輸送を発案して失敗した田島ではないかと記している。ユキコの言の真贋はともあれ、サリーナスでのレタス発展史を書いたガブリエラ・M・ペトリクの論文には、田島隆之の名前は見当たらない。

1933年9月21日～23日付『日米』には、田島隆之の遺産の整理に関する「謹告」を掲載した友人3人のうち、ひとりにはサリーナス在住の谷村栄次郎(1889～1935)で、田島と同郷の広島県出身だった。竹田順一によれば、谷口は1928年夏から秋にかけてのレタス価格好況時に「多大な利益を収めた」が、1935年11月に10人の子どもを残して胃がんで死亡した。長男であるジョージ・タニムラ(1915～2016)は、弟姉妹と協力して農場を切盛りしたが、第二次大戦中にはアリゾナ州ポストン戦争強制収容センターで生活を強いられた。戦後に無一文からサリーナスでのレタス生産を再開した彼は、1940年代終わりには生産者とシッパーを兼ねるバド・アントル社に独占的に供給するようになり事業を拡大した。

5 おわりに

ルーマニア生まれでアメリカに移住した作家のコンラド・ベルコヴィチ(1882～1961)は、1925年9月7日の『日米』に、カリフォルニア州における日系二世中心の学校への訪問記を掲載した。そのなかで、彼が「レタスは日本語で何と言うの?」という質問をして、二世たちは「レタスはレタスだよ」と返答した話が残されている。肉食に合う「パリッ」としたレタスは、日本よりも半世紀以上も前にアメリカの日系移民社会で定着していた証かもしれない。

20世紀初めにアメリカで改良されて氷冷に適したニューヨーク・レタスを日系移民は栽培し、横浜港への船舶で冷蔵輸送して日本へも輸出した。ただし、ホテルニューグランドや帝国ホテルでは、アメリカン・レタスが振る舞われた客のほとんどは欧米人であった。

1932年6月8日の『加州毎日新聞』によれば、アメリカのレタス・ブームに

便乗しようとした銀座のレストラン経営者は、サンフランシスコから輸入したレタスをショー・ウィンドウに飾って、「レタスを食べてアメリカ人の活力を得よう」と宣伝したという。しかし、モダニズム全盛期の日本人の口には、レタスはまだ受け容れられなかったようである。

【参考文献】

- 伊藤信博 (2008) 「『果蔬涅槃図』と描かれた野菜・果物について」言語文化論集 30-1、3-24
- 上坂冬子 (1996) 『三つの祖国—満州に嫁いだ日系アメリカ人—』中央公論社
- 清水克志 (2008) 「日本におけるキャベツ生産地域の成立とその背景としてのキャベツ食習慣の定着—明治後期から昭和戦前期を中心として—」地理学評論 81-1、1-24
- 竹田順一 (1929) 『在米広島県人史』在米広島県人史発行所
- 竹中卓郎編 (1885) 『舶来穀菜要覧』大日本農会三田育種場
- Daniel Geisseler and William R. Horwath (2016) : “Lettuce Production in California”, http://geisseler.ucdavis.edu/Guidelines/Lettuce_Production_CA.pdf 閲覧日 2021/2/20
- Hoover Institution Library & Archives: *Hoji Shinbun Digital Collection*, <https://hojishinbun.hoover.org/?> 閲覧日 2021/2/20
- Gabriella M. Petrick : “Like Ribbons of Green and Gold”: Industrializing Lettuce and the Quest for Quality in the Salinas Valley, 1920-1965, *Agricultural History*, Summer 2006, 80-3, 269-295